

使用実態から見たハズダのジェンダー性について —「ハズ。」と「ハズよ」を中心に—

陳秀茵

本発表では『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ), 『名大会話コーパス』『BTSJ による日本語話し言葉コーパス 2011 年版』を用いて, 書き言葉と話し言葉におけるハズダの使用実態を明らかにした上で, 「ハズだ。」に比べて「ハズ。」「ハズダよ」に比べて「ハズよ」のジェンダー性を中心に考察を進めた。以下の2点が明らかになった。

第一に, 「BCCWJ」において, 普通体でハズダを使う場合に, 「ハズだ」より, 「ハズ。」のほうが多く, とりわけ, 「婦人誌」と「女性週刊誌」において, 「ハズ。」の出現率は非常に高いのに対し, 「ハズだ」は極めて少ない。日本語のジェンダーに関する先行研究はほとんど話し言葉について書かれたものであるが, 書き言葉においても女性的表現が存在しているのではないか。さらに, 実著者の半分以上が男性であることから, 女性読者を想定しているため, 女性に好まれる表現を用いるという意図が推察できる。日本語は話し手の性別による言語的差異が多いが, 聞き手の性別によるもの(「人称代名詞」「親族呼称」「呼称」)は限られている言語として捉えられている。しかし, 「ハズ。」の使用実態から考えると, 書き言葉においては話し言葉と異なる性質がある可能性が考えられる。

第二に, 「BCCWJ」において, 普通体で「ハズダよ」を使う場合に, 「ハズだよ」ではなく「ハズよ」という形式も見られ, 「文学」と「雑誌」2つのジャンルに集中的に出現している。それらはほとんど会話文や心理, 思考描写文であり, 発話や思考の動作手がほとんど女性である。しかし, 実際話し言葉コーパスにおける女性の発話では「ハズよ」ではなく, すべて「ハズダよ」が用いられている。そのように, 文学作品のフィクションの会話文では作者の性別と関係なく, 女性の発話に「ハズよ」が用いられているが, 実際の話し言葉では「ハズダよ」が用いられているというギャップが見られた。読者に動作手と発話者の性別を伝えるため, 「ハズよ」を用いている作者の意図が窺える。そこから, 「ハズよ」は女性的表現として認識され, 役割語の一種として定着している可能性が考えられる。